琉球大学学術リポジトリ

老年学の意義について：公開講座を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): gerontology, lifelomg study, extension lecture, senior citizen 作成者: 下地, 敏洋, Shimoji, Toshihiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44010

老年学の意義について
－公開講座を通して－

下地　敏洋

Significance of Gerontology：Extension Lecture for Senior Citizens

Toshihiro SHIMOJI

Summary

This article aims at considering the possibility of establishing comprehensive gerontology curriculums and understanding real aging process and later years through an extension lecture on gerontology for the aged and lay persons. Japan is a mature society with an elderly population, aged 65 years or over, of 35.2 million accounting for 27.7 percent of the total population. The Japanese government has recognized the importance and the necessity of interdisciplinary research programs on gerontology to improving QOL and good health status, etc. However, there are few universities having courses on gerontology programs in Japan, and general people including the aged have few opportunities to access to aging field. During and after lecturing on gerontology to general people as an extension lecture, their impressions of the elderly were asked and discussed. The results show that they understand the importance and the necessity of studying gerontology because gerontology is useful to understand the real aging process and improving QOL in the later years. In the U.S., the Gerontological Society of America has already been established and 37 universities have master's programs and five universities have doctoral programs in gerontology. This is the best time for Japanese universities, like the University of the Ryukyus because there are many people aged at 65 or over in japan, and Okinawa is the best place to lead the aging programs to understand the real aging process and improving subjective well-being in the later years.

Keywords: gerontology, lifelomg study, extension lecture, senior citizen

Ⅰ．はじめに

内閣府の発表（2018 年）によると，我が国の 65 歳以上の人口（2017 年 10 月 1 日現在）は 3,515 万人（女性 1,989 万人, 男性 1,526 万人）を超え，100 歳高齢者数も 69,785 人（2018 年 9 月 1 日現在）で過去最高となり，この傾向は今後も続くと推測される。2017 年，我が国の総人口に占める 65 歳以上の高齢者は 27.7％で国民の 4 人に 1 人超となり，2030 年に 31.8％で 3.2 人に 1 人，2060 年に 38.1％で 2.6 人に 1 人が 65 歳以上になると予測される。75 歳以上の後期高齢者が総人口に占める割合も上昇を続け，2060 年には 25.7％[1)]，国民の 4 人に 1 人が 75 歳以上になると推測される。

また，平均寿命は 1935 年の男性 46.92 歳，女性 49.63 歳から，2015 年に男性 80.50 歳，女性

86.63 歳と延びた。2065 年には男性 84.95 歳，女性 91.35 歳になると予測され[1]，我が国は世界のどの国も経験したことのない未曾有の超高齢社会を短期間で迎えることになる。そのため，日本国民の英知を結集した取り組みが求められている。

なお，65 歳以上の高齢者のいる世帯数及び構成割合など高齢者を取り巻く環境も変化しており，単独世帯（独居老人世帯）が 27.1%，夫婦のみの世帯 31.5%[1] で，異世代間交流は希薄になる傾向にある。

このような状況の中，全国の小学校，中学校，高等学校において，高齢者あるいは老化に関する正規の授業を実施している実践例の報告は少ない。学習指導要領（高等学校）では，保健（保健体育）の「生涯を通じる健康」と生活と福祉（家庭科）の「高齢者の自立生活支援と介護」などで指導することが示されており，授業の中で単元の一部として取り扱っている。そのため，将来，生徒が迎える高齢期，正しい老化の過程を理解させる取り組みは，十分とは言えない。このように，我が国においては，高齢者や高齢期について学ぶ機会が少なく，高齢者に関する学習や異世代間交流の機会も少なのが現状である。

国内の大学では，老年医学の講座が全国 80 の医科大学あるいは医学部の約 4 分の 1 で開設されている。学際的な学問としての老年学は，大学院レベル又は学部レベルでも講座あるいは研究科としての開設は少ない。[2] 現在，高齢者や老化に関する講義科目を設置している大学は桜美林大学のみで，修士課程及び博士課程が設置され，老年学の領域に従事する研究者や実践家を養成している。2010 年，東京大学がジェロントロジーセンターを設置し，大学院レベルで学際的な老年学研究をスタートさせた。

一方，米国においては，1965 年に The Older Americans Act が通過して学際的な老年学教育が開始された。現在，学部課程が 31 大学，修士課程 37 大学，博士課程 5 大学で老年学部が設置されている。1964 年，南カリフォルニア大学に米国退職者協会の寄付金でアンドラス・ジェロントロジーセンターが設立され，1975 年に大学院を創設，1989 年に博士課程も設置した。[2]現在，学部課程，修士課程，博士課程を設置し，世界の老年学に関する研究を牽引している。

また，米国老年学協会，その傘下にある高等教育老年学協会，北テキサス大学を拠点とする全国高齢化教育学習学会の設立により，大学のみならず，幼・小・中・高校で高齢者及び老化に関する教育を生涯学習という視点に立って学ぶ機会が提供されている[2]。

高齢期は，誰もが経験する重要なライフステージであるが，老化の過程を生涯発達の視点から捉えることの教育の機会は不足している。実際，高齢期イコール衰退期というイメージが先行する中，正しい老化の過程を学ぶ機会は十分とは言えない状況にある。このことが，高齢者に対する差別や偏見を生み出す一要因ともなっており，自分自身の高齢期というライフステージにおける QOL のあり方にも少なからず影響を与えているものと考えられる。柴田（1999 年）も，「老年学は加齢学や高齢者に関する問題のみでなく，むしろ生涯発達理論や世代間問題をも研究する学問といえよう」と述べている[3]。このことは，老年学の必要性と重要性を示唆しており，児童生徒及び成人を対象とした老年学教育においても教育的視点に立って老年学を学ぶことの意義は十分であると考えられる。

Lichitenstein 他（2005 年）は，中・高校生はエイジングに対して強いイメージが形成されているのではなく，高齢者や老化に関する変化についても誤った考えが定着することはないため，老化や健康増進について教育することに適した時期であると述べている。[4] Dobrosky と Bishop（1986 年）は，人生の早い段階で学んだ態度は，私たち自身及び他人に対する考え方や言動に大きな影響を与える，と述べている。そのため，人生の早期段階で高齢者や正しい老化の過程を学ぶことは，実際の老化のプロセスが多様性に富んでいることや個人差が大きい点においてのみ考えるとしても大きな価値がある。つまり，発達段階が早ければ早い段階にあるほど，正しい老化のプロセスを理解することにつながり意味がある。[5]

このように，高齢者や高齢期に対する理解の深化は，将来，超高齢社会を生きる高齢者自身

及び児童生徒にとって有益であると考えられる。そのため，老年学の導入の可能性に示唆を与えるものと考え，今回の公開講座を実施した。参加者には討議を活発にするため学生等の若い世代も期待していたが，55歳以上の成人のみの参加となったため，異世代間の十分な討議を深めることはできなかった。

従い，本稿の目的は一般成人，特に高齢者に対して高齢期の特徴及び価値並びに生きがい等について，授業形式で情報提供をすることで，高齢者自身が高齢期及び高齢者に対する理解を深化することに寄与することの意義を明確にすること並びに課題等について把握することである。また，今後の老年学教育の在り方，超高齢社会を生き抜くための生涯学習への提言，及び今後の老年学の果たす役割について考察する。

Ⅱ．老年学の意義について

老年学と教育老年学の特徴について述べる。

老年学とは，「老年あるいは老化を共通の研究課題として，医学，生物学，心理学，及び社会学などの各分野から老年期を多面的に解明していくとともに，老年期における多様な具体的諸問題に総合的に対処するための視点の提示を目標とする学際的な研究領域である。」[2)]

また，老年学を講義する際，教育老年学も重要である。教育老年学とは，「高齢化と生涯学習の問題を，エイジングと成人の学びとを，より根本的な次元から結びつける新しい学問分野である。それは，高齢者への生涯学習という枠組みを超える体系，老いの価値を探る学問，教育という視点から人生の後半部を見つめる学問，でもある。」[6)]

つまり，教育老年学とは生涯発達と生涯学習をクロスさせた学問であり，老化を生涯発達の視点から見つめる学問である。

また，老年学又は教育老年学を授業として設定する理由について，次のように捉えることができる。

①高齢期を生涯発達の視点から捉えることで，高齢期そのものが単独に存続するのではなく，現在の延長線上にあることを理解する機会となる。そのことで，将来に備えて，今何をすべきか，どのような人生設計をするのか，人生の意義等について考える機会とすることができる。

②超高齢社会に生きる一人として，広い視野で社会の実態を捉えることを通して，自分自身の高齢期や地域社会の高齢者についても考え，かつ正しい老化の過程を理解することができる。

③キャリア教育の視点に立ち，将来経験するライフイベントを正しく捉えることで，将来の進路及び職業選択に役立てることができる。

なお，老年学の授業を高齢者に実施することによる成果について，次のように捉えることができる。

①高齢社会，高齢者及び高齢期の特徴について，理解を深化させることができる。

②高齢期を正しく理解することで，高齢期に対する不安を軽減し，高齢者に対する差別や偏見をなくすことができる。

③人生の意義や価値観及び生きることの意味について考えることができる。

④正しい老化のプロセスと生涯発達の完成期としての高齢期を理解することができる。

Ⅲ．実施方法

本講座は，平成30年度琉球大学公開講座で一般市民向け講座として，「老年学への招待－主観的幸福感をいかに高めるか－」のテーマで実施した。概要は，超高齢社会が進展する中，高齢期の特徴と老化のプロセスを理解することは，生涯学習社会の構築を目指す上で，ますます重要なものとなっている，であった。本講座では，老年学の研究成果を通して社会学的，生物学的，及び心理学的な領域から正しい老化のプロセスを学ぶことで，人間の加齢変化や主観的幸福感に関して，理解を深めることを目的とした。講義の内容は，理論と実践の融合を目指し，「生涯発達」を共通のコンセプトとして，お互いの議論を通して正しい老化のプロセスに対して理解を深め，主観的幸福感を高めることが主なねらいである」であった。

講師は筆者で，開催日時は，平成 30 年 6 月 30 日（土）, 7 月 7 日（土）, 7 月 21 日（土）の 13：00 ～ 15：00 であった。7 月 21 日（土）は台風接近のため , 7 月 28 日（土）も追加講座として実施した。

会場は琉球大学教育学部棟であった。

主な講義内容は , ①老年学とその可能性 , ②正しい老化のプロセス , ③主観的幸福感の影響要因 , であった。

受講者は，沖縄県本島全域から申し込みがあり , 事前申込者は計 39 名（男性 14 名，女性 25 名）であった。1 名は事前登録取り消しがあったため , 調査対象人数から削除した。平均年齢は , 66.67 歳（38 ～ 85 歳:記載なし 3 名）であった。事前登録なしの受講者は 5 名であった。

Ⅳ．講座内容の概要

本公開講座は 3 回シリーズで実施した。内容は資料のとおりであった。（巻末資料参照）

Ⅴ．アンケート調査結果

本公開講座終了後，大学より内容等について，アンケート調査を実施した。結果は，次の通りであった。

1. 実施日及び協力者

本アンケート調査は，7 月 21 日（土）及び 7 月 28 日（土）に実施し, 回答への協力者, 30 名（内訳：男性 11 名 , 女性 18 名 , 未記載 1 名）であった。

2. 協力者の年代

アンケートへの協力者の年代の内訳は,「20 代」1 名（大学院生、第 3 回のみ出席）(3.3%) ,「50 代」2 名（6.6%）,「60 代」15 名（50.0%）,「70 代」12 名（40.0%）であった。（表 1）

表 1　年代

年代	人数(%)
～40代	1 (3. 3)
50代	2 (6. 6)
60代	15 (50. 0)
70代	12 (40. 0)

3. 協力者の職業

アンケートへの協力者の職業は,「学生」1 名（3.3%）,「自営業」2 名（6.6%）,「会社員 2 名」(6.6%) ,「公務員」2 名（6.6%）,「非常勤」1 名 (3.3%) ,「その他」1 名 (3.3%),「なし」16 名 (53.3%),「未記載」5 名 (16.7%) であった。（表 2）

表 2　職種

職　業	人数(%)
学　生	1 (3. 3)
自営業	2 (6. 6)
会社員	2 (6. 6)
公務員	2 (6. 6)
非常勤	1 (3. 3)
その他	1 (3. 3)
な　し	16 (53. 3)
未記載	5 (16. 7)

4. 本講座の確認方法（複数回答）

講座を確認した方法は,「(大学からの) 小冊子」6 名 (18.8%) ,「新聞」18 名 (56.3%) ,「テレビ・ラジオ」0 名 ,「インターネット」2 名（6.3%）,「友人･知人」4 名（12.5%）,「その他」1 名 (3.1%),「未記載」1 名（3.1%）であった。（表 3）

表 3　確認方法（複数回答）

入手方法	人数(%)
小冊子	6 (18. 8)
新聞	18 (56. 3)
TV・ラジオ	0 (0)
インターネット	2 (6. 3)
友人・知人	4 (12. 5)
その他	1 (3. 1)
未記載	1 (3. 1)

5. 受講目的（複数回答）

受講目的は,「学ぶ楽しさを得るため」11 名（22.9％）,「教養を高めるため」9 名 (18.8%) ,「日々の生活に役立ちそうだから」19 名 (39.1%) ,「仕事の役に立ちそうだから」0 名,「他の機関・施設の講座では物足りなかったから」0 名 ,「大学という場で勉強をしたかったから」2 名,「その他:」7 名であった。（表 4）

表 4　受講理由（複数回答）

学ぶ楽しさを得るため	11(22.9)
教養を高めるため	9(18.8)
日々の生活に役立ちそうだから	19(39.1)
仕事の役に立ちそうだから	0
他の期間・施設の講座では物足りなかったから	0
大学という場で勉強をしたかったから	2(4.2)
その他	7(14.6)

①退職後、今後の生活をどう過ごそうかと考えているとき、テーマを見てぜひ受講したいと思ったから。
②今後、生き生きと余生を楽しむため。
③今後年齢を重ねていく上で参考になりそうな講座だと思った。

その他の項目に関連する記載事項事項は，次の①～③であった。

①退職後，今後の生活をどう過ごそうかと考えているとき，テーマを見てぜひ受講したいと思ったから。

②今後，生き生きと余生を楽しむため。

③今後年齢を重ねていく上で参考になりそうな講座だと思った。

6．満足度

満足度は，「とても満足できた」14 名（46.7％），「ある程度満足できた」13 名（43.3％），「どちらともいえない」0 名，「あまり満足できなかった」0 名，「まったく満足できなかった」0 名，「未記載」3 名（10.0％）であった。（表 5）

表 5　満足度

満足度	人数(%)
とても満足	14(46.7)
ある程度満足	13(43.3)
どちらともいえない	0
あまり満足でない	0
まったく満足でない	0
未記載	3(10.0)

7. 希望する講座の内容（複数回答）

「大学程度の専門性を持つ内容」3 名（5.1％），「大学院程度の専門性を持つ内容」1 名（0.2％），「年齢層に応じた内容」16 名（27.1％），「性差に応じた内容」1 名（0.2％），「職業に役立つ内容」0 名，「社会貢献に結びつく内容」8 名（13.6％），「学問への誘いとなる内容」7 名（11.9％），「実生活に役に立つ内容」23 名（39.0％），「その他」0 名であった。（表 6）

表 6　希望講座（複数回答）

内　容	人数(%)
大学程度の専門性を持つ内容	3(5.1)
大学院程度の専門性を持つ内容	1(0.2)
年齢層に応じた内容	16(27.1)
性差に応じた内容	1(0.2)
職業に役立つ内容	0
社会貢献に結びつく内容	8(13.6)
学問への誘いとなる内容	7(11.9)
実生活に役に立つ内容	23(39.0)
その他	0

8．公開講座案内パンフレットの置き場所（複数回答）

「小冊子「講座の案内」の配布場所の工夫」5 名（11.1%），「小冊子「講座の案内」の希望者への直接配布」6 名（13.3%），「新聞折り込みの利用」16 名（35.6%），「テレビ・ラジオの活用」15 名（33.3%），「インターネットの充実」3 名（6.7%），「その他」5 名であった。（表 7）なお，「その他」に関連する内容として，次のような記載があった。

①図書館や博物館など

②市町村の広報誌に挟んで配る（3 ～ 4 か月分の講座案内）

③公民館に置く

④前回の受講者に郵送する。図書館で配布。

⑤地域の公共施設等

表 7　公開講座案内パンフレットの置き場所（複数回答）

場　所	人数(%)
小冊子「講座の案内」の配布場所の工夫	5(11.1)
小冊子「講座の案内」の希望者への直接配布	6(13.3)
新聞折り込みの利用	16(35.6)
テレビ・ラジオの活用	15(33.3)
インターネットの充実	3(6.7)
その他	5(11.1)

①図書館や博物館など
②市町村の広報誌に挟んで配る（3～4か月分の講座案内）
③公民館に置く
④前回の受講者に郵送する。図書館で配布。
⑤地域の公共施設等

9. 感想（改善点や運営方法）

本講座及び関連する内容に対する感想は次の通りである。原文をそのまま掲載したが，本講座と関連がないものは削除した。

(1) いろいろ勉強になりました。今後の人生の参考にしたいと思います。ありがとうございました。宮古島出身の私が宮古のことをあまりわかっていないことに気づかされました。これから学びたいと思います。・先生の研究に感動しました。エピソードも楽しく興味深かったです。来年が楽しみです。内容は何でもいいです。
(2) 本講座の継続をお願いします。講座の回数も 6 ～ 10 回が良い。討議の時間もあった方がよい。
(3) 老年学という言葉も初めて知りました。タイムリーなので勉強になりました。楽しい充実した時間を過ごすことができ，ありがとうございました。
(4) 改めて，「人は人で生かされる」ということを感じました。自分の人生を語っていい人や来てくれる人，認めてくれる人の存在はとても大きく，そのためにも「交流」が必要であるとわかりました。交流することで，存在意識を知ったり，自己肯定間を高めることができ，それが自己・他者を大切にする気持ちにつながります。しかし，一人一人幸福感を感じることは違いますが，孤独で生きるツラサは共通しているので，幸福感を高めるために，交流が必要だとわかりました。その楽しさや心地よさを教えられる，チャンスを扱えられるのも，学校（最初のコミュニティ）であるのではと思ったので，交流の大切さを伝えられるようにしたいです！
(5) 今日のように 7 月週 1 回老齢について考えることができました。
(6) 老年学であれば生き生き参加できるボランティアなども含めてほしい。
(7) 老年学の重要性について，社会は認識すべきだと思います。
(8) 老年学の最新の研究をまた聞きたい。
(9) 老年学，嵐でも来たら集まっていた。ありがとうございました。
(10) 地域で生き生きしている後期高齢者の日常生活や幸福感を聞いてみたいです。
(11) 受講生数名であるテーマでの話し合いなども取り入れ全体でシェアする事もあるともっと良かったと思う。
(12) 老年学非常に参考になりました。沖縄の現状，文化，歴史等も並行して学べたら，もっと興味が増大すると思います。
(13) 後期高齢者に関する良き人生の進み方を勉強したく思いましたので，とてもありがとうございました。
(14) 老年学への招待に関する希望する講座内容:研究･調査対象者の公開講座（老年学）への参加，または研究･調査現場映像（ビデオ）などの公開など・・・，県内・県外における老年学に対する研究・調査等の公開など。
(15) 教授（講師）の研究過程や研究内容のみでなく，その研究から知りえたこと実生活にどう生かされてかなどの内容にしてほしい。今回講義は私にはレベルが高かったと思います。
(16) 高齢者（80 歳以上）で，人生を生き生きと生活している人の生の意見を聞いてみたい。健康面，趣味，社会的な関わりの面から。
(17) 新聞の情報案内に掲載されていた「老年学」は興味をいだき応募しました。ＴＶ・ラジオの健康番組はよく観たり聴いたりしていますが，このように体系的に学ぶ機会はなかったのでとても勉強になりました。友人ともいろいろ話し合っていきたいです。希望：高齢者で活躍なさっている方の体験談を聞きたいです。
(18) 健康で長生きするには。

その他，講座の前後にいろいろと次のような質問や要望があった。

(1) 本講座を年 2 回程度実施して欲しい。このことについては，多くの受講者から要望があった。
(2) 実施時間帯についても，午後ではなく，午前で実施した方が午後の時間が有効活用できる等の要望があった。
(3) シンガポールの平均寿命が世界一である要因は何でしょうか。

(4)「社会情動的選択性理論」の内容について教えてください。
(5) 英語表記が理解できない人も多いので，できるだけ日本語での表記と解説をお願いします。
(6) 実際に，長寿で頑張っている高齢者の話を直に聞きたい。
(7) 実際に調査している時の動画とか，録音テープ等を視聴したい。

Ⅵ．考察

本公開講座の実施及びアンケート調査の結果を通して，今後の老年学教育の在り方，超高齢社会を生き抜くための教育への提言，及び今後の老年学の果たす役割について考察する。

1. 今後の老年学教育の在り方について

地域社会において，老年学を通して正しい老化のプロセスを理解する機会を提供することは，多くの効果をもたらすことが考えられる。

一つ目に，予防医学や生理的老化と病的老化等の正しい老化のプロセスを理解することで，健康寿命を延ばし，かつ医療費の抑制に寄与するものと考えられる。厚生労働省（2018 年）によると，平成 28 年度の国民医療費は 42 兆 1,381 億円（前年度比 , 2,263 億円 , 0.5％の減少）で，人口一人当たりの国民医療費は 33 万 2,000 円（前年度比 , 1,300 円 , 0.4％の減少）である。国民医療費の国内総生産（GDP）に対する比率は 7.81％（前年度 7.93％），国民所得（NI）に対する比率は 10.76 ％（ 同 10.85％）である。[7]

年齢階級別にみると , 0 ～ 14 歳は 2 兆 5,220 億円（構成割合 6.0％）, 15 ～ 44 歳は 5 兆 2,560 億円（同 12.5％）, 45 ～ 64 歳は 9 兆 2,017 億円（同 21.8％）, 65 歳以上は 25 兆 1,584 億円（同 59.7％）となっている。[7]

このように，医療費は年々上昇し続けており，その中でも 65 歳以上の高齢者の支出の割合が高い。避けることのできない医療費の支出は当然であるものの，老化のプロセスを十分理解することで，抑制できるものもあると考えられる。従来，高齢期を迎えると誰もが同様に慢性的疾病に罹患すると考えるケースが多々あったのだが，実際には加齢や老化の在り方は多様である。疾病の疾患等も個人差が大きいことを理解することには，生活習慣や健康づくりの重要性に影響を与え，かつ医療費の抑制につながるものと考えられる。

二つ目に，高齢期の生活習慣に多くの示唆をもたらすことが考えられる。従来，生理的老化と病的老化の違いに対する理解が十分に浸透しなかったため，加齢とともに誰もが一様に病気や機能的減退を経験すると考えてきた。老年学の研究知見を共有することで，老化は個人差も大きく，老化のプロセスは多様であることが理解できる。また，身体機能，認知症，リューマチ性関節炎や骨粗鬆症等に対する正しい知識を得ることになる。その結果，生理的老化及び病的老化に対する理解が深まり，対応と予防策についても議論が深まるものと考えられる。

このことは，今回の公開講座においても，生理的老化と病的老化の違いについて説明した際，多くの受講者から初めて知ることが多く，実際に個々人により違いがあることが報告された。また，健康維持のため，地域活動に加え，普段の生活で個人的に水泳やテニスなど健康維持増進に努めていることが肯定され，今後も継続する自信になった等の発言があった。

三つ目に，地域の文化を生かすことで，特に高齢者が中心的役割を果たす伝統行事等は重要であると考えられる。下地（2009 年）は高齢者の幸福感に与える要因として地域文化行動の重要性を述べている。地域の伝統行事の果たす役割は、高齢者の役割もさることながら神や祖先との一体感にも影響を与えることから、高齢者の幸福感に及ぼす要因となっている，と述べている。[8] 今回の受講者の多くは，清明祭や旧盆など伝統行事に参加する機会を得ており，高齢者としての役割を果たしていることが理解できた。しかしながら，伝統行事において高齢者としての役割を果たすことが，心身の健康にどのような影響を及ぼしているのかについて考え，理解したことは初めての経験であることの意見が多かった。

四つ目に，参加者が自分自身の人生を振り返ることができることもメリットの一つであった。回想法などで自分のライフイベント等を振り返

り，自分の人生を肯定的に感じることができるようになる。自分の人生を相手に伝えることで，他人と共有することができる。また，自分の人生を肯定的に捉えることができ，改めて価値を見出すことができる。このことは，心の安定にもつながるものと考えられる。実際，「これまでの人生を振り返って，自慢できることは何ですか」の質問に対しても，客船で世界一周をしたことなどの紹介があり，苦労話もあるものの人生を通して頑張ったことなどの内容が報告され，共有されたことは意義深いものがあった。

五つ目に，正しい老化を理解することは，高齢者や高齢期を正しく理解することでもあり，異世代間及び高齢者間で高齢者への差別や偏見を抑制することができる可能性があると考えられる。高齢者に対する理解不足は，経済的貧困や慢性的疾患などに対する理解不足だけでなく，裕福で幸福感の高い生活をしている等の誤解も多いことも事実である。高齢者や高齢期を正しく理解することが，若い世代及び高齢者間で高齢者に対する偏見や差別の軽減につながるものと考えられる。

今回の講座においても，高齢者理解のための質問で，①「65 歳以上の高齢者の大多数は，認知症（記憶が落ちたり、ボケたりする）である」，②「少なくとも高齢者の 10 名中 1 人が，ナーシングホーム（老人ホーム）など高齢者住宅等の長期滞在型施設で生活している」等 15 の質問に対する回答で，誤答率が高めの質問項目が多くみられた。[3] このことは，世代に関係なく教育の機会に影響されることが大きいことを示唆しており，他の研究等でも同様の報告されている。高齢者を含め人々は，自分自身の経験及び教育を通した情報等に基づき，高齢者や高齢期を理解及び判断する傾向がみられる。そのため，老年学教育を通して正しい老化のプロセスの理解を深めていくが重要であり，老年学教育を通して異世代間の交流を促進することもさらに必要であると考えられる。

結果として，高齢者の理解度調査の内容である高齢者の身体的及び精神的機能の現状に関する質問において，高齢者の現状については十分に理解されていないことが考えられる。Donatelle（1988）によると，米国の調査結果では，学部学生の正答率は 65%，大学院生 80%，大学教員 90% である。[9] このように，教育の機会が増え，教育水準が高くなるにつれて，正答率も高くなる傾向にある。

柴田（2000 年）は，老年学の研究が熟していない時期において，社会の中で支援ニーズの高い障害や貧困者等の高齢者にのみが注目されるので，偏見が生まれやすい環境にある，と述べている。このことは，社会が成熟し，教育の機会が提供されることで正しい老化の過程が理解され，かつ高齢者の実態が明確となり，高齢者に対する差別や偏見がなくなることを示唆するものと考えられる。

将来，人々が経験する高齢期や高齢者について，人生設計というキャリア教育の視点からも捉えることが大切であり，人生の早期段階で高齢期の特徴や正しい老化のプロセスを理解するための教育の機会が必要ではないだろうか。そのような取り組みの中でも，異世代間交流が鍵を握るものと考えられる。堀と大谷（1995 年）は，大学生と高齢者の高齢者への偏見に関する研究で，偏見形成の過程においては，テレビなどマス・メディアなどの間接的な影響力よりも，高齢者との実際の接触そのものが高齢者への偏見是正に大きな影響要因になる，と述べている。[11]

２．超高齢社会を生き抜くための教育への提言

最初に，生涯発達の視点から自分の人生を考えることが重要である。老年学を通して，正しい老化のプロセスを学ぶことにより，人間は生涯に亘って発達し続けるものであることを理解することが，高齢者への差別や偏見をなくす一助となる。また，誰もが高齢期を迎えることを理解し，各ライフステージにおけるライフイベントに向けての課題を理解した上で，対応についても考える機会となる。

次に，異世代間交流を促進することも重要である。地域の高齢者と子どもたちとの交流，及び地域の人々との交流を通して，異世代間の相互理解を深化させることができる。

高校生や大学生など若者が高齢者との交流を通して，学ぶことの意義は何であろうか。堀（1999

年）は，①高齢者の多くが職業や人間関係などをはじめとする知識や技能に関する教育プログラムに寄与する専門的知識に精通していること，②学習を普段の生活の中で応用していく能力に優れていること，③高齢者には多くの経験があり人生の価値など人間が生きる上で大切なことを理解している，の3点を挙げている。[6)]

一方，高齢者が若者から学ぶことに関して，堀（1999年）は，①高齢者に希望や冒険に向かう姿勢の喚起など高齢者が若者時代に有していた理想主義の復権，②新しいフロンティアの開拓など知的発見の感覚の更新，③未来感覚の回復などを挙げている。高齢者がこのようなことを踏まえ，交流を促進することで，若い世代の役割モデルとなる高齢者から人生で大切なことを学ぶことができる。[6)]

さらに，命のありがたさを理解するこで，いじめ等の抑制に効果をもたらすことも考えられる。つまり，生きることの大切さを学ぶこと，人生の価値を理解することで，子どもたちの間のいじめの抑制にも寄与することが期待できる。結果として，偏見や差別をなくす教育となることも考えられる。多様な高齢者に接することで，特徴をもった者同士が協力及び相互理解の大切さを学ぶことで差別や偏見を抑制することができるものと考えられる。羽鳥（2005年）は，青少年期から，祖父母など高齢者とより良い関係を構築し，高齢者に対する肯定的イメージが定着することになり，交流との交流回数が多くなることは，偏見を是正する効力につながる，と述べている。[10)]

また，高齢者に対する偏見形成過程について，堀（1999年）は，大学生を対象とした研究を通して，マス・メディアなどを介しての影響力よりも高齢者と実際に交流や接触があることが老化への理解を深め，偏見をなくすことを担っている，と述べている。[11)] 同様のことが，高校生にも当てはまることの可能性を考えると，今後，高齢者施設などにおいて児童生徒と高齢者の交流促進，学校現場へ高齢者を講師として招聘するなど高齢者を正しく理解することで，老人差別や偏見の解消に寄与することの可能性において検証する必要がある。正しい情報に基づいた老人観を育てるためにも，高齢期に関する教育の在り方が重要であると考えられる。

このような状況において，正しい老化の過程や高齢者の理解，高齢者に対する偏見や差別是正の観点から教育老年学を教育現場に導入することは，価値があるものと考える。そのことが，超高齢社会を迎え，多くの人々が高齢期を経験する我が国において，高齢期を経験することの過度の恐怖感を和らげることに役立つものと考える。

堀（2006年）は，高齢者の偏見形成過程について,「新聞の中での老人の扱われ方（0.15）」「性別が過去の職業（0.31:$p < 0.001$）」「性別が学歴（-0.27:$p < 0.001$）」「学歴が過去の職業（-0.37:$p < 0.001$）」「地域活動への参加度（-0.29:$p < 0.01$）」「一般老人との会話頻度（-0.35:$p < 0.001$）」との相関が強いと述べている。[12)]

また，大学生の偏見形成過程について，「祖父母の地域活動への参加（-0.17:$p < 0.05$）」「老人不要に対する姿勢（0.18:$p < 0.05$）」「家族の中での老人の扱われ方（0.21:$p < 0.01$）」「親の老人不要に対する姿勢（0.41:$p < 0.001$）」「生き生きした印象（-0.25:$p < 0.05$）」「融通が利かない印象（0.23:$p < 0.01$）」と相関が強いと述べている。[13)]

このように，差別形成においては，育てられてきた家族の祖父母に対する接し方及び高齢者自身の地域活動，特に直に高齢者と交流することが大きな役割を果たしているように考えられる。マス・メディアなど間接的な影響力よりも，高齢者との実際の交流，差別や偏見をなくすことが重要であると考えられる。

３．今後の老年学の果たす役割

老年学は学際的な学問領域であり，関連領域のコラボレーションが必須であるため，ジェロントロジーセンターのような機能を持った研究及び学習施設が必要である。

高齢期のライフステージで生起する課題の多くは，高齢期を迎えて突然生起するものではない。高齢期は，現在から人生の延長線上にある最終ステージにある人生の統合期・完成期なのであり，生涯発達の視点から人生そのものを捉

える必要がある。

従って，今後も老年学を教育現場で導入するための努力を継続することに価値があると考える。

また，高齢期に生涯発達の視点を取り入れることで，将来，現在の高校生など若い世代が高齢者の仲間入りをする時，彼らの生活満足度や幸福感を高めることに寄与するものと考えられる。

しかしながら，老年学を学校現場に導入する際，課題が多いことも避けることのできない事実である。堀（2006 年）は教育現場における教育課程，指導者など従来の学校教育と一線を画している，と指摘してる。[14] また，教育老年学も学部課程を修了し，かつ修士課程や博士課程で学ぶという現実，死生観を取り扱う生命倫理観など，人生そのものを扱う見識を備えていることも求められるからである。羽鳥（2005 年）は，高齢者に対する差別をなくするために，専門職はそれぞれの時代を生きる高齢者に関する正確な知識を身につけることを強調している。[10]

このように，老年学が生涯学習で果たす役割は大きく，「教授的老年学」「社会老年学」「老年学教育」「老年関係専門職教育」でなく，「高齢者教育」「啓発的老年学」の重要性が益々大きくになっている。[15]

引用文献

1) 高齢社会白書（内閣府）: http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/zenbun/30pdf_index.html
入手日　2018 年 9 月 18 日
2) 国際長寿センター: 日本におけるジェロントロジー確立に関する報告書　2000.
3) 柴田博：アメリカ合衆国の老年学教育，老年社会科学，21(3)：358-371，1999.
4) Lichtenstein,.Michael J, 他，Do Middle School Students Really Have Fixed Images of Elders? Journal of Gerontology, 60B(1), 537-547, 2005
5) Dobrosky,Barbara J.,and Bishop, James M. Children's perceptions of old people. Educational Gerontology, 12, 429-439, 1986
6) 堀薫夫：教育老年学の構想－エイジングと生涯学習，ii，学文社，1999.
7) 厚生労働省：https://www.mhlw.go.jp/topics/medias/year/17/dl/iryouhi_data.pdf
入手日　2018 年 9 月 18 日
8) 下地敏洋：高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究－宮古出身者の地域文化行動を通して－，沖縄県立看護大学大学院博士学位論文，2006.
9) Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH，p 423，1988, Pretice-Hall, Inc. New Jersey.
10) 羽鳥美香，エイジズムと社会福祉実践：専門職の高齢者観と実践への影響，文京学院大学研究紀要，17（1）：89-100，2005.
11) 堀薫夫，大谷英子：高齢者への偏見の世代間比較に関する調査研究，大阪教育大学紀要，44（1）：1‐12，1995.
12) 堀薫夫：教育老年学の展開，p139，学文社，2006
13) 前掲書 12) p.140
14) 前掲書 12) p.31
15) 前掲書 12) pp.2 ～ 4

参考図書

1. Donatelle J. R., Davis G.L., Hoover F.C. Annotated Instructor's Edition ACCESS TO HEALTH 1988, Pretice-Hall, Inc. New Jersey.
2. 安藤進　他，老化のことを正しく知る本，東京，中央出版　2000.

資料：実施内容及び配布資料

パワーポイントで資料を配布及び提示しながら，授業を進めた。当初は，異世代間の議論を深めるためにグループワークを取り入れることを予定していたが，人数が大幅に増加したことと年代は偏りがあることで，授業形式の内容が多くなった。

Ⅰ．第 1 回（平成 30 年 6 月 30 日）

1. 導入
   (1) 高齢者が主役の映画等の紹介
   (2) 日本では老年学への理解が遅れた背景要因
2. 老年学について
   (1) 定義
   (2) 目的
   (3) 重要性
3. 主な老年学関連学会について
   (1) 米国
   (2) 日本
4. 老年（高齢者）心理学について
   (1) 定義：佐藤　眞一（大阪大学大学院人間科学研究科教授）の定義を引用
5. 老年（高齢者）心理学成立の歴史について

(1) 米国
(2) 日本
6. 老年医学（Geriatrics）について
(1) 定義
(2) 超高齢社会における高齢者医療の目標
(3) 高齢者に必要な全人的総合医療
7. 高齢者について
(1) 定義
(2) 年齢による高齢者の区分
(3) 前期高齢者と後期高齢者の特徴
8. 高齢化率（平成 27 年 10 月 1 日現在）について
(1) 全国と沖縄県の特徴
(2) 平成 72（2060）年の予測
(3) 世界（2015 年）の特徴
(4) アジア地域（2015 年）の特徴
9. 平均寿命（2015 年現在）について
10. 平均寿命世界ランキング（2016 年）について
11. 世界の長寿 4 地域（Blue Zones）について
12. 年齢の価値について
※高校生のアンケート調査から
13. 高齢者の理解度について
14. ケーススタディ（What Do You Think?）：高齢者の再婚について
15. まとめ

Ⅱ．第 2 回（平成 30 年 7 月 2 日）

1．正しい老化のプロセスと生涯発達から考える老化について
(1) 老化の概念
(2) 正しい老化
(3) 老いの理由と予防：病気ではない
(4) 健康寿命
(5) 生涯発達と基本的欲求
(6) 長寿要因
(7) 老化研究
2. 受講者への質問
(1) これからの生活で期待していることは何ですか。
(2) これからの生活で心配していることは何ですか。
(3) これまで苦労したことは何ですか。
(4) 人生で自慢できることはなんですか。
3. 老化の概念について
(1) 老化（Senescence）の定義
(2) 生理的老化と病的老化
4. 正しい老化のプロセスについて
(1) 老化の原因は多くの学説があり，「絶対にこれが正しい」というものは存在しない。
(2) 老化は，「宿命」でも「必然」でもない。
5. 人が老いる理由について（1）
(1) ゴンペルツ・パターン：成熟後、人間の死亡率は 8 年ごとに 2 倍になる。
(2) 歳固有死亡率
(3) 人はなぜ老いるのか
6. 人が老いる理由について（2）
(1) 進化論的老化論
7. 老化防止の可能性について
8. 老化と病気について
(1) 老化研究が難しい理由
(2) 今後の老化研究に必要なこと
9．健康寿命について
(1) 健康寿命（Healthy Life Expectancy）とは
(2) 健康寿命の延長に向けて
(3) 介護が必要となった主な原因
(4) 良い選択
10. 老化研究の目的について
11. ケーススタディ（What Do You Think?）：配偶者が認知症となった時
12. エリクソンの発達段階について
13. マズローの人間の基本的欲求について
14. ハヴィガーストの発達課題について
15. 老年期の課題について
16. 老年期の不適応について
17. Blue Zones の長寿要因について
(1) Sandinia's Blue Zone Lesson：イタリア
(2) Okinawa's Longevity Lessons：喜如嘉
(3) Loma Linda's Blue Zone Secrets（南カリフォルニア）
(4) Costa Rica's Longevity Secrets
18. 老化研究の神秘について
(1) デヴィッド・スノウドン（藤井留美訳），2004 年，100 歳の美しい脳，DHC
※アルツハイマー病を発症しても症状が現れない脳の紹介
19. 百寿者解析について
(1) 百寿者の病歴（老化の生物学：石井、丸井）
20. まとめ

Ⅲ．第 3 回（平成 30 年 7 月 21 日）

1. 主観的幸福感に関する研究の紹介（著者の研究）
(1) 高齢者の地域文化行動が幸福感に及ぼす影響に関する研究－宮古出身者の地域文化行動を通して－
(2) 県内老人ホームでの研究について
(3) 米国シカゴ市での研究について
2. 幸福感について：OECD（西村美由紀訳），2015. OECD 幸福度白書，明石書店.
(1) 幸福度の高い国
(2) 平均レベルの幸福度の国
(3) 相対的に幸福度が低い国

3. 幸福度の背後にある共通点について
4. 主観的幸福について
   (1) 定義
   (2) 最近の研究成果
   (3) 主観的幸福の 3 つの側面
5. 主観的幸福度データについて
6. 主観的幸福の決定要因について
7. 高齢者の死生観について
8. 芸術品としての人生について：Robert N. Butler, 1975, Why Survive? Being Old in America
9. まとめ

○第 4 回（平成 30 年 7 月 28 日）

第 4 回は，台風接近により第 3 回に参加できなかった受講者 10 名を対象に実施した。内容は，第 3 回と同様であった。